

2017年(平成29年)

4月7日

金曜日

朝日新聞

町医者の研究に高い評価

太田秀樹 13

人生支える在宅医療

最期は自宅だと願っていたも、現実は大勢の人が病院で死を迎えている。なぜだろうと真剣に考えるようになったのは10年前である。在宅終末期医療を題材にしたドキュメンタリー映画を当地で撮影した。羽田澄子監督は「みんな安らかな死を

望んでいるのに、往診する医師が少ないのでやむなく病院で最期を迎える」と考えていた。

でも、この考えには少々首をかしげた。なぜなら僕が往診を行っている小山市、栃木市、茨城県結城市では、最期まで自宅で診てほしいと在宅医療に信頼

を寄せて、在宅医療を希望する市民が多い市と、そうでない市がある。医師が往診しても、患者が選択してくれなくては、在宅医療は普及しない。どう考えても医療の問題だけではない。あるとき在宅医療に関するシンポジウムで、「医師の往診だけでは在宅医療推進がはかれない」と発言した。すると、老年学者で東大特任教授の秋山弘子さんが共感され、在宅医療の普

及推進に関する研究を東大高齢社会総合研究機構から研究者を迎えて行うこととなった。

独立行政法人「科学技術振興機構」社会技術開発研究センターからの助成金で、在宅医療を取り巻く医療や介護の課題だけでなく、コミュニケーションや行政の役割など七つの視点としてまとめた。統計学を駆使した専門外の研究で苦労したが、成果は高い評価をいただいた。町医者が研究とはおこがましいが、この領域は僕たちの出番だ。病院ではできない医療を目指し、現場主義を貫いてきたことがちよっと誇らしい。(次回14日)



おれた・ひでき 1953年、奈良市生まれ。自治医大大学院修了。92年「おやま城北クリニック」開業。現在は医療法人アスムス理事長として在宅医療を推進。

とちぎの風